

二宮尊徳の哲学とその形成過程

— 小田原時代前期（一七八七—一八一二）を中心として —

二宮 康 裕

目 次

- 一 はじめに
- 二 哲学形成の過程
- 三 自然災害からの影響
- 四 書物からの学び
- 五 体験からの学び

一 はじめに — 二宮金次郎尊徳とその略歴 —

二宮金次郎といえば、全国の小学校に薪を背負いながら読書に励む像で多くの人々に知られ、親孝行で向学心旺盛な模範少年として描かれてきた。彼は江戸後期の封建時代の動揺期に、農村の立て直しや農民の生活改善に向けて、まさに率先垂範で活躍した人物である。特定の師を持たず、天地人を我が師として、自らの実践を背景に特有の哲学を完成した人物として評価されている。その人生哲学や実践行動には今なお学ぶべきものが尽きない。

金次郎の幼少期からの苦難の体験と周囲の人々の善意は、彼の学問を裏付ける強固な信念として体系化されていた。彼は貨幣経済の発展による農民・武士階級の貧窮に率先垂範することによって、勤儉・分度・推譲の指針を示した。封建支配体制に順応しつつ、その枠組みでは計れないほどの傑出した人物であると思う。

筆者は尊徳の一族に連なるものとして縁浅からぬものを覚えつつ成育した。特に尊徳哲学の形成にあたり、従来の研究が、桜町以降の文献を中心になされてきたのであるが、彼の哲学形成は小田原時代に中心があったのではないかと思ひ、少年期から青年期に至る彼の考え方、人生観がどのように形成されていったのかを明らかにしたいと考えた。今回、機会を得て、その探求の一端をまとめて発表することにした。

まず、尊徳の人生の略歴を掲げよう。それは苦節に満ちた真に波瀾万丈の歩みであったのである。

一七八七年（天明七）、相模の国栢山村（現小田原市栢山）に農民二宮利右衛門の長男として生まれる。幼名を金次郎、次男は友吉（後の三郎左衛門）、三男は富次郎（夭折）。

一七九一年（寛政三）、一八〇二年（享和二）に酒匂川の洪水に襲われ、所有の田畑は砂礫に覆われる。父利右衛門は病がちで、次第に所有の田畑を薬代などで失う。その父は一八〇〇年（寛政一二）金次郎一三歳の時に病没し、母よしも後を追うように一八〇二年（享和二）病没する。その後の金次郎は伯父の万兵衛に、第二人は母の実家である川久保家に預けられる。しかし、金次郎は艱難辛苦を乗り越え、

一八一〇年（文化七）には所有田畑約二町四反五畝を持つ中農として一家再興を成し遂げる。

一八一二年（文化九）、小田原藩家老、服部十郎兵衛の中間として奉公し始める。この服部家奉公時代に商業的な才覚を身に付け、後には服部家の家政取り直しを任せられ成功を収める。

一八一七年（文化一四）、隣村の中島弥之右衛門の娘、きのと結婚する。

一八一八年（文政元）、小田原藩主、大久保忠真侯より奇特者として酒匂川河原で表彰され、藩主忠真との関係の端緒が開かれ、後の小田原藩の報徳仕法採用に繋がる。

一八一九年（文政二）、きのと離婚し、翌年岡田峯右衛門の娘、なみと再婚する。

一八二二年（文政五）、大久保忠真侯より服部家家政再興等を評価され、忠真侯実弟、宇津家領（下野国桜町四千石）の復興を命じられ、田畑、家屋敷、家財道具、一切を売り払い栢山を去り、桜町に赴く。名主役格高五石二人扶持をもって待遇される。

良民表彰・金穀の貸し付け・税の減免や自身の廻村激励等、種々の努力をなすが、豊田正作らの反対もあって桜町領の復興は容易に進まず、思い餘って一八二九年（文政一二）に、誰にも告げずに成田山に参籠する。この参籠で悟りを開いたのか、以後の活躍は覚醒的であり、復興は順調に進み、一八三一年（天保二）桜町仕法第一期を完了する。

一八三四年（天保五）、尊徳の主著である『三才報徳金毛録』を完成する。

一八三六年（天保七）、桜町仕法一五年にして復興完成する。天保の飢饉に際して小田原領救済の命を受ける。翌年にかけて飢饉が深刻化するや小田原に赴き救援活動を始める。蔵米を放出させ、大久保侯

のお手許金を賜り、小田原領民四万人余を救済する。

この前後に各地の仕法を手掛け多くの成功をみる。

一八四二年（天保一三）、幕臣に転じる。御切米二〇俵二人扶持の御普請役格となる。日光仕法雛形を作り日光仕法に着手する。

一八四三年（天保一四）、尊徳と名乗る（書簡等では、終生、金次郎または金治郎で通した）。

一八五六年一〇月二〇日病没する（六九歳）。

主な弟子 富田高慶、斉藤高行、福住正兄、岡田良一郎ら。

二 哲学形成の過程

日本の哲学史を考えるに、聖徳太子以前の原始的な神道から始まり、飛鳥・奈良・平安・鎌倉・室町と仏教の影響力が顕著となる時期を経て、徳川家康による儒学の導入と江戸幕府の儒学官学化政策による儒学全盛時代を迎えるわけであるが、まさに尊徳の育った時代の儒学は幕府の昌平黉はもとより、各藩の藩校、私塾や庶民向けの寺子屋でも中心的な役割を占めていたのである。

しかし、神道・仏教も廃れたわけではなく、神道は国家開闢の学問としてだけでなく伊勢信仰をはじめ庶民に至るまで定着していたし、仏教も人間界に於ける輪廻観・極楽往生への憧れといった心的世界を保持しつつ、日常的な生活倫理として根付いて行った。そんな中において幕府は統治政策の一環として儒学の奨励を図り、封建的倫理観で武士から庶民に至るまでの精神的支配を目指していたのである。

そのような背景の中で、尊徳哲学の心髄である「一円相」「一円仁」の哲学がいかんして形成されたのか、その基礎となる幼少期・青年期までの過程を本稿では追究したい。尊徳哲学の集大成ともいえるべき『三才報徳金毛録』が著されたのは一八三四年（天保五）尊徳四七歳の時である。まさに悟りを開いた成田山参籠後のことである。これ以後の尊徳は熱情のみならず意欲的に仕法（各地の改革）、著作にも力を注いだ。主な著作には『大円鏡』『万物発言集』『百種輪廻鏡』『空仁二名論稿』『天命七元図』『三世観通悟道伝』『農家大道鏡』『一体三行録』『万物一円鏡』など多数がある。

しかし、このような仕法・著作が一夜にしてできる筈もなく、尊徳が成育過程の中でしだいに自己の思惟の中に取り込んでいったことは明白である。以下、この尊徳哲学存立の形成過程を順を追って明らかにしたい。

従来、尊徳哲学の研究が桜町転居以後を中心になされているのであるが、尊徳の哲学形成はむしろ小田原時代に負う所が大きいのであるまいか。小田原時代は尊徳の生い立ちであり、環境であり、学問習得過程である。それらを解き明かすことこそが尊徳哲学の内実を迫る近道の筈である。

二宮尊徳は自らの哲学を「神儒仏正味一粒丸」と称している。斉藤高行の『二宮先生語録二五』（二宮尊徳全集第三六卷三四九頁）で次のように言う。

吾れ我が法を創設するや、神、何を道となし、何に長じ、何に短たるや、儒、何を要となし、何に益し、何に損なるや、仏、何を主となし、何に得し、何に失するやと、各々その理を窮め、三教を合し、興国安民の一大法となす、なお、藥劑、三昧を合し、一粒丸となすがごとし。

尊徳は神道・儒教・仏教をただ合わせてよい点を混ぜ合わせたのではなく、三教を鋭く分析かつ批判した上で、これの空論的部分を否定し、自らの実践を通して三教の合理的部分の要点をつかみ、さらに報徳仕法の中に取り入れていたのである。

尊徳は、何よりも自然・実証体験を重視し、空理空論を排した。少年期よりの苦難の体験（若くに両親を失ったこと、酒匂川の洪水によって田畑が砂礫で埋没されたこと）や、天の恵みによって荒地地から収穫を得たことが、天地自然界の運行の認識につながり、天地間における自らの実践と連関させ、やがて、尊徳の哲学形成の大きな要因の一つとなったことが上げられよう。

学問上の師を持たなかった尊徳は、道歌で「声もなく、香もなく、つねに天地は書かざる経をくりかえしつ」と詠み、自然の真理を己に対する教えとしたのである。

もちろん、自然・実証体験ばかりが尊徳の哲学形成に寄与したのではないことは明白である。尊徳の思想形成に大きな影響を与えたとされる『大学』・『論語』・『中庸』さらには『大和俗訓』からは儒教的教訓を学んでいる。尊徳の著書・書簡・日記にもこれら書物からの引用が多い。

ところで、通例では二宮尊徳の思想形成過程を三期に分けている。（下程勇吉京都大学名誉教授ら）

- 一期 小田原時代 （一七八七～一八二二年）
 - 二期 桜町移住～成田山参籠 （一八二三～一八二九年）
 - 三期 成田山参籠後 （一八二九～一八五六年）
- しかし、本稿では尊徳の思想形成過程を四期に分ける。
- 一期 小田原時代前期 （一七八七～一八一一年）
 - 二期 小田原時代後期 （一八一二～一八二二年）
 - 三期 桜町移住～成田山参籠 （一八二三～一八二九年）
 - 四期 成田山参籠後 （一八二九～一八五六年）

小田原時代を前・後期に分けるのは、前期は尊徳が農民として苦難の道を歩みながらも、その過程の中で天地人から多くのことを学んだ期間であり、後期は所有の農地を小作に出し、自らは服部家の中間として武家社会の仕組みや思考過程を学ぶとともに、商人との取引を通して理財の道を会得した期間であるからである。尊徳が勤勞・儉約（分度）・推譲を唱えたのは彼の前期における農民としての体験ばかりでなく、後期になって中間としての見聞や商人の利潤追求の辛さを認識したからである。この後期の体験は、後に農民を商業的金融資本による高利貸し付けから護る低利の報徳金の貸し付けに繋がるのである。

三 自然災害からの影響

この尊徳思想形成の揺籃期には、自然災害の脅威をまず指摘しなければならぬ。一七九一年（寛政三）八月六日、酒匂川の吉田島堤（現開成町）が決壊し、利右衛門所有の田畑はほとんどが土砂に覆われた。特に吉田島村・曾比村・栢山村が被害に遭った。富田高慶の「報徳記」には大口堤決壊とされているが、これは尊徳の記憶違いの反映と思われる。

栢山村は環濠集落のように深い堰と竹林によって二重に防備されていたが、万兵衛家と利右衛門家だけが五ヶ村堰の外側（現在でも）にあつて被害に遭いやすい位置に住居を構えていた。栢山では万兵衛家のことを河原の家と呼んでいる。この呼び名も再三の洪水と無関係ではあるまい。尊徳は当時のことを「梁の上にあがり、下に鮎が泳ぐのが見えた」と述懐している。

吉田島堤が切れると水流は仙了川沿いに流下した。利右衛門の田畑もこの川沿いにあつたために被害が大きかった。一八〇二年（享和二）再び吉田島堤が決壊し金次郎の田畑はことごとく土砂で覆われた。父母を失い悲嘆にくれる金次郎兄弟にこの洪水は致命的な追い討ちとなった。

そもそも酒匂川は丹沢山塊に源を發し、相模湾に至るまで全長約四五キロメートル。栢山付近では川幅約二四〇メートルであるが、平常の水流は幅数十メートル程である。しかし、一度豪雨に見舞われるや一転して凶暴な性をむき出しにし、流域村落に多大な被害を与えるのである。

栢山がこのような洪水災害に襲われるようになったのは大久保氏の統治政策と密接に関連している。

従来酒匂川は現在の流路よりも約二キロメートルほど西側の要定川（洞川付近であつたものを、大久保氏は酒匂川を東に移して足柄平野の中央部を貫流させることにより、石高の増収を図つたのである。そのため山麓を流れ下つた大口付近（現南足柄市）に堤防を造り、流路を東に変えたのである。松田村付近で川音川と合流させ、その地点からほぼ相模湾まで直線的に流路を築いた。

この流路変更は酒匂川左岸に多くの新田を生み出し、藩の増収には繋がつたものの、急流をまともに受け止めねばならない大口堤に大きな負担がかかるようになった。特に一七〇七年（宝永四）の富士山噴火によって上・中流に大量の火山灰・火山砂が堆積し、それが降雨のたびごとに酒匂川に流入し、川底を浅くしていった。一七〇八年（宝永五）には大口堤が決壊、一七二一年（正徳元）にも大口堤が決壊し、以降一七二六年（享保一一）幕命を受けた田中丘隅によって再建されるまで堤は破れたまま放置され、下流域に当たる村落（怒田・斑目・千津島・俣下・竹松・和田河原・生駒・駒形新宿・岩原・沼田・府川）は長期間に渡つて多大な犠牲を強いられた。大口堤は極めて堅固な堤防として信じられたため、田中丘隅は神様のように崇められた。

しかし、高台に避難していた村民も旧集落に戻り始めた頃の一七三四年（享保一九）未曾有の豪雨が酒匂川流域を襲い、大口堤のみならず酒匂川は各地で破堤し足柄平野は大半が水没した。このため旧村落に帰還していた村民は大いに田中丘隅をうらんだと伝えられている。

幕府は一七三六年（元文元）簀笠之助に修堤をさせ、以来今日に至るまで大口堤の決壊はない。大口破堤がなくなるとは下流での破堤を意味し、この後はしばしば吉田島堤・三角土手などが破堤し、酒

句川兩岸の村落に断続的に被害を与えるようになった。(二宮尊徳全集第一四卷二三九頁、「大口土手沿革史」に詳細あり)

この期間は、約七〇年を周期に小田原地方を襲ってきた地震も起きていないし、天明と天保の大飢饉の間にもあたり偶然にも大災害は酒匂川の洪水だけである。

尊徳はこの洪水で自然の脅威を学びとつたのみならず、人間を超越した自然の偉大さを自己の思惟の中に取り込んだ。福住正兄の『二宮翁夜話続編一』(二宮尊徳全集第三六卷八三一頁)には、尊徳の体験を基にした天道と人道の概念を明らかにしている。

天道は自然に行はるる道なり、人道は人の立つ所の道なり。元より区別判然たるを相混ずるは間違いななり。人道は勤めて人力を以て保持し、自然に流動する天道の為に押流されぬ様にするにあり。天道に任する時は、堤は崩れ、川は埋り、橋は朽ち、家は立腐となるなり。人道は之に反し、堤を築き、川を浚へ、橋を修理し、屋根を葺きて雨のもらぬ様にするにあり、身の行も亦此の如し。

この中で、尊徳は「天道」とは自然界における万物の生成や時の流れによる万物の変遷、人間界に於いても避けられない病苦や生死、植物の繁茂や立ち枯れ、人工構成物の自然腐食などの自然現象をさし、そこにはどうすることもできない自然の偉大さを示している。無常観ともいべき虚しさの反面、生成の喜びも同時に思惟に入れている。

また、「人道」とは人間の行為によって、自然界の運行に逆らい、人間が生活していく上で役立つことをすることである。草を取り、用水路を修理し、農業が円滑にできるようにすることである。時として人間には怠け心が起き、「天道」の力がまさると家は朽ち、作物は枯れ果てる。つまり、人間の努力によって、天の摂理に勝ると述べる。

尊徳は少年時代に酒匂川との関わりを持つている。栢山の住民は、散歩がてら酒匂川の土手に上り、その流れを見て爽快感にひたることが多い。恐らく金次郎少年も、勤勞の疲れを癒す一服の清涼剤として酒匂川の土手に上ったのであろう。金次郎が「土手坊主」と称される程、酒匂川について見て回ったのは、この爽快感を求めたのと治水を視野に入れての両面を考慮に入れるべきだろう。

多分に逸話的部分を内包しながらも、金次郎の酒匂川との関わりについて数多く伝えられている。最初は酒匂川の修堤に関する逸話である。一七九八年(寛政一〇)に坂口堤に蛇籠を並べる夫役が各戸に割り当てられた。父利右衛門が病のため、一一歳の金次郎が代わりに参加した。蛇籠とは竹で編んだ籠のことで、およそ直径六〇センチメートル(二尺)、長さ約五メートル(三間ほど)あり、村の北端の栢山神社の境内に常備されていた。その籠を堤防に運び、石を詰めて内側の斜面に並べる仕事や、川底の砂礫を浚う仕事である。力のいる仕事であり、金次郎は一人前に見なされなかった。

そこで金次郎は、自分にできる仕事として夜なべして草鞋を作り、夫役に出た村人に配ったと伝えられている。河原や蛇籠の上を歩くと爪先に強い力がかかり草鞋が切れることが多くなることを金次郎が気付き、草鞋を作り、配ることによって村人に認められたわけである。金次郎の気配りが忍ばれる逸話

である。この逸話について富田高慶は『報徳記巻一』（二宮尊徳全集三六卷六六頁）で次のように記している。

年々川除、堤の土功息まず。故に邑民毎戸一人づつを出して此役に當らしむ。先生二二（数え年）より此役に出て以て勤む、然れども年幼にして力足らず、一人の役に當るにたらず、天を仰ぎて歎じて曰、我力足らずして一家の勤に當るに足らず、願くは速に成人ならしめ玉へと。又家に帰りて思らく人我が孤にして貧なるを憐恕し一人の役に當るといへども我心に於て何ぞ安ずる事を得んや、徒らに力の不足を憂るも詮なし、他の勞を以て之を補ずんばある可らずと。

是に於て夜半に至る迄草鞋を作り翌未明人先に其場に至り、人々に言て曰余若年にして一人の役に足らず他の力を借て之を勤む、其恩を報ずるの道を求めども得ず、寸志なりといへども草鞋を作り持来り、日々我が力の不足を補ふ人に答へんと云。衆人其志の常ならざるを賞し之を愛し、其草鞋を受けて其力を助く。

役夫休すれども休まず、終日孳々として勤む、此故に幼年なりといへども怠らざるが故に土石を運ぶこと却て衆人の右にいづ、人皆之を感ず。

金次郎は健気な少年を思う村人の優しさを肌で感じ、それに対する金次郎の報恩の気持ちが草鞋という形となって表現されたことになる。この時の思いが後、「以德報徳」思想に体系化されることになる。

これと連関する逸話が、坂口堤に松苗を植えたことである。

一七九九年（寛政一一）に子守賃として得た二〇〇文で松苗二〇〇本を買い、これを栢山村北東にあたる坂口堤に植えたと伝えられる。残念ながらこの松は、現在一本も残っていない。現在の坂口堤の松は明治初年に植えられたものであることが松の年輪から確認されている。（神奈川県松田土木事務所・栢原土木事務所調べ）

栢山村の洪水対策は主として北西からの流下に対して行われている。村落北端の栢山神社を中心に竹林と深い堰（五ヶ村堰）で二重に護られている。しかし、東側は堰も浅く、竹林も少なく、坂口堤の決壊は栢山村に多大な被害を与えることは明らかであった。これは一九一〇年（明治四三）年の坂口堤決壊による栢山村の損害を見ると明白である。この北東部の弱点を金次郎少年が気付いていたのかどうかは定かではないが、一二歳にして自己の賃金を村落の洪水対策に投じることに至ったのは前出の草鞋の逸話の延長と考えるのが至当である。

尊徳は幼少の洪水体験から始まり、「土手坊主」とあだ名されるほど酒匂川を見て回り、その間に川の流れの性質、恐ろしさ、利用法などを自己学習したであろう。この酒匂川の洪水体験は、尊徳のその後の治水事業の大きな参考になった筈である。用水路作業時の分水場所とか、排水路の流水経路（特に栢山村の場合、地下水位が高く、しかも水温が低い）とか、洪水防止のための土手の作り方などは十分な体験学習をしたであろうし、共同作業の必要性を痛感したことも間違いない。後の酒匂堰開削工事には近郊の農村から多勢の動員に成功し、四日で完成させたという。

参考 「富士山宝永噴火以降の酒匂川の洪水」 『土地分類基本調査』（神奈川県）から。

- 一七〇七年（宝永四） 富士山噴火（直前に東海・南海地震）
- 一七〇八年（宝永五） 酒匂川洪水（岩流瀬堤・大口堤決壊）。足柄平野大半が水没。
- 一七一一年（正徳元） 酒匂川洪水（大口堤決壊）。酒匂川は平野中央部を分流する。
- 一七三四年（享保一九） 酒匂川未曾有の洪水（大口堤他各所で決壊）。足柄平野は水没する。
- 一七六三年（宝暦一三） 酒匂川洪水（向原堤・吉田島堤決壊）
- 一七九一年（寛政三） 酒匂川洪水（岩流瀬堤・吉田島堤・金手堤決壊）。金次郎洪水初体験。
- 一八〇二年（享和二） 酒匂川洪水（岩流瀬堤・吉田島堤決壊）。金次郎二回目の洪水体験。
- 一八〇三年（享和三） 酒匂川洪水（岩流瀬堤・吉田島堤決壊）。金次郎三回目の洪水体験。
- 一八五七年（安政四） 酒匂川洪水。各所で氾濫し、足柄平野一帯に出水。
- 一九一〇年（明治四三） 酒匂川洪水。栢山堤（坂口堤）決壊。栢山大被害。

尊徳は、少年期の洪水体験を基に天道と人道の概念を学ぶと共に、至誠・勤勞が及ぼすところの影響をも感じとった。また、堤防の夫役から以德報徳の精神を学びとった。それは、金次郎が病気の父に代わって、酒匂川の夫役に出た時、一一歳であるがために村人から一人前に見なされなかった。そこで金次郎は草鞋を作り、村人よりも真剣に作業することによって一人前の夫役として認知されたのである。この体験は金次郎の徳（心を込めて行うこと）が村人の心を動かし、優しさに変えてしまったことである。

る。

四 書物からの学び

(一) 実語教

尊徳の知の形成において、どんな学問を学んだかについて少し追究してみると、尊徳が一番初めに読書したと思われるのが『実語教』と『童子教』である。六〜七歳の頃から父利右衛門に学んだとされる。

『実語教』とは平安末期から近世初頭にかけて広く用いられた初等教科書。作者は未詳。鎌倉初期には普及されていたので、平安末期頃の作と思われる。漢詩流の五言句四八連で構成されている。内容は、智慧礼讃に始まり、智慧をもって現当二世に輝く不朽の宝とみている。ついで智に至る道は学にありとし、学の道は人間の全的活動すべてにつながっている。智は行によって獲得せられるべきであるがゆえに、実践こそは真の意味において学習である。かくて智から出発して学にいき、学から行に進み、ふたたび学に戻っている。

本書はすでに鎌倉・室町時代においてかなり流布していたが、江戸時代にはいって、単独ないしは『童子教』らと合わせて、さかんに刊行され（最古の刊行は一六二三年）、往来物の一つに数えられて、広く普及した。本書が後世の初等教科書界に与えた影響ははなはだ大きかった。（石川 謙、『世界大百科事典』平凡社、から要約）

金次郎が『実語教』から何を学び、いかに人生に生かしていったのかを検討してみたい。実語教の主たる部分を次に抜粋してみる。

人不学無智	無智為愚人	人学ばざれば智なし。智なくば愚人となす。
雖積千両金	不如一日学	千両の金を積むといえども、一日の学にはしからず。
財物永不存	才智為財物	財物は永く存せず、才智を財物となす。
幼時不勤学	老後雖恨悔	幼なき時勤め学ばざれば、老いて後に恨み悔うといえども、
尚無有所益		なお、所益有することなし。
故讀書勿倦	学文勿怠時	故に書を読みて倦むことなかれ。文を学びて怠たる時なかれ。
除眠通夜誦	忍飢終日習	眠を除きて通夜誦ぜよ。飢えを忍びて終日習へ。
雖習誦不復	只如計隣財	習い読むといえども復せざれば、ただ隣の財を計るが如し。
父母孝朝夕	師君仕昼夜	父母には朝夕に孝せよ。師君には昼夜に仕えよ。
兄已尽礼敬	弟已致愛顧	己より兄には礼敬をつくし、己より弟には愛顧を致せ。
敬老如父母	愛幼如師弟	老いたるを敬うことは父母の如く、幼きを愛することは子弟の如くせよ。
我敬於他人	他人亦敬我	我、他人を敬えば、他人また我を敬う。
猶不忘農行	必莫廢学文	なお農行を忘れず、必ず学文を廢することなかれ。

是学文之始 終身勿忘失 此れ学文の始めなり、身を終わるまで、忘失することなかれ。

実語教の漢文自体、難易度はそれほど高くないものの、その文意を理解するには素読だけでは不可能であろう。勿論、現代の六〜七歳前後の少年たちには到底読めないし、理解もむずかしからう。何故なら、文章の裏を理解するには、儒教の各書物の理解や仏教に関する知識もかなり深く要求される。密教などの理解も必要であり、よって、読書百遍、意自ずと通ず、というわけにはいかなかったろう。当然、師の存在が必要であった。

金次郎は六〜七歳頃、利右衛門から初学の書として『実語教』の訓釈を受けたと思われるが、その後金次郎の行為から、「学問の大切さ」、「父母への孝養」、「兄弟愛」、「他者へのいたわり」などを学んだと思われる。金次郎は特に、学問は繰り返し学ぶことが大切であるということ学んだ。それは尊徳晩年にも、少年期に学習した書物からの引用文の多さや、尊徳の遺品の中に多くの初学とされる書物が残されていたことから窺われる。

(二) 童子教

金次郎が『実語教』と相前後して利右衛門から学んだのが『童子教』と考えられている。

『童子教』は『実語教』とならんで、日本中世・近世の最も重要な初等教科書。著者については唐の白樂天とも天台密教の安然ともいわれるが、いずれも信じがたい。鎌倉末期の作と推定されているが、室町初期にはすでに普及し、ことに江戸時代には著しい普及を示した。その体裁は漢文調の五言三三〇句

から成る。この書の目的は幼童に因果の理を内典・外典を出して説き明かそうとするにある。したがってその構想は、前半は儒教の格言を中心に日常道徳を説き、後半の初めは中国の匡衡以下一四人の例によつて学問を勧め、智の必要を説いて来世に結び、つぎに西夢以下一二人の例によつて父母への孝養を、最後に現世の榮華のはかなさを説いて、道徳教科書として道筋を整えている。(近藤 斉『世界大百科事典』平凡社、から要約)

なお、中国では童子とは七、八歳から二〇歳以前の者をいう。

三宝尽三礼	神明致再拜	三宝(仏法僧)には三礼をつくし、神明には再拜を致す。
人而有陰徳	必有陽報矣	人として陰徳あれば、必ず陽報あり。
人而有陰行	必有照名矣	人として陰行あれば、必ず照名あり。
心不同如面	譬如水隨器	心の不同は面の如し。たとえば水の器ものに随うが如し。
君子不譽人	則民作怨矣	君子人を譽すば、すなわち民怨みを作る。
入郷而隨郷	入俗而隨俗	郷に入りては郷に随い、俗に入りては俗に随う。
一日学一字	三百六十字	一日に一字を学ばば、(一年には)三百六十字。
朝早起洗手	撰意誦經書	朝には早く起きて手を洗い、意を撰して經書を誦せよ。
誦千卷不復	無財如臨町	千巻を読むとも復せざれば、財なくして町に臨むが如し。
薄衣之冬夜	忍寒通夜誦	衣を薄くする冬の夜も、寒きを忍びて通夜誦せよ。

匡衡為夜学	鑿壁招月光
蘇秦為学文	錐刺股不眠
車胤好夜学	聚螢為灯矣
宣士好夜学	積雪為光矣
劉寃乍織衣	口誦書不息
倪寬乍耕作	腰帶文不捨
又削弓短矢	腰常挾文書
許孜自作墓	松柏植作墓
生死命無常	早可欣涅槃
煩惱身不淨	速可求菩提
壽命如蜉蝣	朝生夕死矣
見他布施時	可生隨喜心
悲心施一人	功德如大海
為己施諸人	得報如芥子
出内典外典	見者勿誹謗
聞者不生笑	

匡衡は夜学のために、壁をうがちて月の光を招く。
 蘇秦は学文のために、錐を股に刺して眠らず。
 車胤は夜学を好みて、螢をあつめて灯となす。
 宣士は夜学を好みて、雪を積みて光となす。
 劉寃は衣を織りながら、口に書を誦じてやまず。
 倪寬は耕作しながら、腰に文を帯びて捨てず。
 また弓を削り矢をはぐとも、腰には常に文書をさしはさめ。
 許孜は自ら墓を作り、松柏を植えて墓となす。
 生死の命は無常なり、早く涅槃を欣ぶべき。
 煩惱の身は不淨なり、速やかに菩提を求むべき。
 壽命は蜉蝣の如し、朝に生じて夕に死す。
 他の布施する時を見る、隨喜の心を生ずべし。
 悲心一人に施せば、功德大海の如し。
 己がために諸人に施せば、報を得ること芥子の如し。
 内典(仏書)外典(儒書)より出でたり、見る者誹謗することなかれ、
 聞く者笑いを生ぜざれ。

『童子教』からは「儒教的道徳観念」、特に「父母への孝養」や「学問の大切さ」を学び、仏教的見地からは例を基に「この世の無常」、「布施の大切さ」を学んでいる。

(三) 実語教と童子教からの影響

この少年期に読むべき二種の書物の中から、金次郎が具体的行動に於いてどのような影響を受けたのか、またいわゆる金次郎伝説がこの書物を利用して逸話を創作している可能性はないかを探り出したい。さて、『実語教』『童子教』と実際の金次郎の行動を比較してみると、やはり、金次郎が実際にこの二書を手本として活用したと思える箇所が散見される。また、尊徳晩年まで脳裏に残っていたように思える場面も見られる。

まず第一に、『実語教』の中では、

除眠通夜誦 忍飢終日習 眠気をさまして一晚中読書しなさい。飢えを我慢して一日中学びなさい。

を受けとめ、父母の死後、万兵衛家に引き取られ、行灯に着物を掛け、灯火がもれるのを気にしながら夜学に励んだ姿を想起させる。また、

雖習読不復 只如計隣財 習い、読んでも繰り返さなければ、ただ隣の家の財産を数えるようなものだ。

は、やはりほぼ同時期の逸話として残っている「ぐるり一遍」と称されている事に符合する。つまり、玄米を精米する際に、臼に玄米を入れて杵でつきながら臼の周りを回る度ごとに「大学」「論語」の一行を読んだとされる箇所である。

また、

父母如天地 師君如日月 父母は天地の如く、情愛深い存在であるし、先生と主君は太陽や月のように光り輝いているものだ。

父母孝朝夕 師君仕昼夜 父母には一日中、親孝行しなさい。先生や主君には昼夜分け隔てなくお仕えしなさい。

の中では、父母への孝養を強く意識したと思える行動が随所に見受けられる。父利右衛門が病に罹り、一歳の金次郎が父に代って酒匂川堤防工事の夫役に出た逸話や、父の治療代を医師村田道仙に届けたが、道仙が哀れんで半額だけを受け取り、残りを返却した。この時の子供心に喜び帰る姿、また、父の好物であった酒を購入する為、草鞋を作り、縄をなう姿が彷彿とされる。父がどんなにか喜んで一杯の

酒を飲んだであろうか。

中には、この場面をとらえて父の行為を悪意にとる著作物もあるが、素直に金次郎の親への孝養と考えるのが自然であろう。

母に關してはあまり多くの逸話は残っていないが、病がちであった母に代わって、弟友吉とともに農耕に励んでいたが、貧窮の餘り、末弟の富次郎を西栢山の奥津甚左衛門に預ける。しかし、母の乳が張るのを聞いたたり、母が三男富次郎を思う気持ちへの憐憫から、富次郎を引き取った。

また、文政元年に酒匂川河原で藩主大久保忠真侯より表彰されたことからか、藩主への敬愛の念を深め、ついには文政五年藩主より下野国桜町領復興を委任され、一家をあげて小田原を去り、任務遂行にあたることになる。祖先伝来の地を去ることに、相当の決意がなかったらできないことである。この決意のあらわれか、家屋敷をはじめ、諸道具をすべて売り払っての小田原退去であった。これも藩主大久保忠真侯への純心な敬慕と忠義があつたからであろうことは容易に想像できる。その後、天保の飢饉に際しては小田原にかけつけ、藩領民救済のために全力をそそぎ、藩主との信頼関係もあつて、小田原藩では領民の救済に成功するのである。

あるいは、

見他人之愁 即自共可思 他人の身の上の心配事を見ては、すぐにも自分のことのように心配し

なさい。

の文では、坂口堤の松の逸話が浮かんでくる。

金次郎一三歳の時、酒匂川左岸の村で賃仕事をした帰り道、堤防で松苗を売る商人に出会った。金次郎は商人の表情に愁いを感じたのか、それとも単なる洪水予防のためかは定かではないものの、松の苗木二〇〇本を二〇〇文で買い求め、坂口堤に植えた話が残っている。東栢山の位置と地形や洪水対策の村作りから、大口堤や吉田堤の決壊を想定して、北及び北西からの濁流を考えていたものと思える。

金次郎としては東栢山の東北に位置する坂口堤が決壊したら、村はひとたまりもないと思つたのだろうか、松の苗木をこの堤に植えた。確かに東栢山部落は東側に洪水予防の対策が弱い。環濠も浅いし、竹林も少ない。坂口堤に立てば、金次郎がここに松苗を植えた意図が理解頂けると思う。しかし、一三歳の金次郎がここまで考えていたかは多少の疑問が残るが、植木商人の愁い顔に同情したとみるよりも、金次郎が本気で栢山村の愛いを絶とうとしたと考える方が、後述する酒匂川の夫役の逸話とも符合する。第二に、『童子教』からは何を学び、いかなる具体的行動につなげたのであろうか。

倪寛乍耕作 腰帶文不捨 倪寛は田畑を耕作しながらも、腰に書物を帯びて捨てなかつた。

又削弓短矢 腰常挟文書 また、弓を削り、矢をはぐような時でも、腰にはいつも書物をはさんでいた。

からは、全国の小学校にある金次郎像が浮かんでくる。金次郎が薪を伐りに明神ヶ岳山麓の矢佐芝山に、

『大学』を大声で読みながら往復した光景が浮かんでくる。金次郎が通ったと思われる東栢山から堀之内・小台を経由して矢佐芝山に向かう道筋は、両側が水田で人通りも少なかったろうから、金次郎が大声で音読しても障害にはならなかった。しかし、中には狂人扱いをした村人もいたという。

車胤好夜学 聚螢為光矣 車胤は夜学を好み、螢を集めて光とした。

宣士好夜学 積雪為光矣 宣士は夜学を好み、雪を積んで光とした。

からは、万兵衛家に預けられた金次郎が一六歳の時、仙了川の土手に菜種を栽培し、その収穫物を油屋に売って夜学の灯火の油にした逸話に符合する。

蘇秦為学文 錐刺股不眠 蘇秦は学文のために、眠くなると錐を股に刺して眠らなかった。

俊敬為学文 繩懸頸不眠 俊敬は学文のために、眠くなると首に繩をかけて眠らなかった。

の箇所でも金次郎に似たような逸話が残っているものの、逸話の域を出ない。

『善栄寺縁起』(六六頁)によると、

一六歳の頃、まだ伯父万兵衛宅に寄宿中のことだが、ある日朝早く、野良に行こうとして善栄寺の

前を通ると、一人の少年が、手習いのため寺門を入れて行くのを呼び止めて、少年の持っている手習草紙の上に、『二日に一字づつ習えば一年に、三六五字となるぞこの小僧』と即座に書いて少年を激励した。

という話が載っているが、これは明らかに童子教の、

一日学一字 三百六十字 一日に一字を学べば、一年間には三六〇字を学ぶことになる。

の影響であろう。しかし、万兵衛家の田畑も金次郎の田畑も善栄寺の方角とは反対方向にあたり、また、太陰暦からいって、三六五字ということもやや信憑性に欠けるものの、学問の大切さ・継続の必要性を感じとった金次郎がこのような内容の行動をとつても不可思議とは言えない。

同様に『善栄寺縁起』(六七頁)には、飯泉観音での逸話も伝えられている。一八〇四年(文化元)、金次郎一七歳の時、小田原からの帰途、酒匂川対岸の飯泉観音に立ち寄った。その折、旅の僧が観音経を唱えていたのに感動し、錢二〇〇文を与え、再誦を請うたという逸話であるが、僧の唱えた観音経が通常の呉音で唱えたのではなく、訓で唱えたため金次郎に深い感銘を与えたとされている。

金次郎は観音経の内容に感銘を受けたこともあるが、むしろ、僧の誦経の真摯さにうたれたのではあるまいか。それは『童子経』の一節、

見他布施時 可生随喜心 他人が布施をするのを見ると、ありがたさが心に湧いてくる。
 悲心施一人 功德如大海 慈悲の心からわずか一人にほどこす功德は大海のごとく、多くの布施
 となる。

の影響が見てとれる。この逸話から、わざわざ酒匂川を渡って飯泉観音に詣でる程の仏教への純真な帰依が窺える。また、同縁起では金次郎がその感動を抑えがたく、善栄寺の考牛和尚こうごうにその感動を伝えたとされている。これは金次郎の仏教への帰依に関する逸話として初見のものである。

このように金次郎に関する少年期の逸話は『実語教』『童子教』とかなりの相関関係があるように感じられる。基本的には金次郎がこれら二書を感じ動を持って読み、素直に実践してきたことが窺われるが、後世の意図的な金次郎美化が否定できない箇所も見られる。

しかし、金次郎が大の学問好きであったことや、学んだことを即実践に移したこと、両親への孝養の深さ、弟たちへの愛情の深さ、他人への思いやり、そして何よりも勤勞を尊んだことが窺われる。

このような金次郎の少年期の行為は、両親の薰陶くんたうなくしてはあり得ない。金次郎の異常なまでの向学心には父利右衛門の影響が深く感じられる。利右衛門は病がちでしだいに財産を失ったとはいえ、金次郎に対して相当の熱意をもって学問を教えたことが窺われる。金次郎の孝養の深さも親の愛情なくしては考えられない。

このことを富田高慶は、『報徳記巻一』(二宮尊徳全集第三六卷六四頁)で、

艱難かんなん彌々よよ迫り三子を養ふに心力を勞すること幾千萬、先生終身、言、此事に及べば必ず涕泣ていなきして、父母の大恩無量なることを云ふ。聞く者皆之が為に涕なみだを流せり。

と伝え、両親への孝養心を終生保ち続けたことを表している。病気がちの父へのいたわりの気持ち、父を失った後の母への愛情の深さが切々と伝わってくる。父母への愛情はしだいに家族から一族へ、一族から一村へと発展していく。

(四) 『孝経』

次に金次郎が読んだと思われるものが『孝経』である。その内容と少年金次郎に与えた影響を考えてみたい。

『孝経』とは中国二三経の一つである。中国では古えより初学の書として位置付けられていた。比較的平易な文章である。作者は不明だが諸説ある。孔子・曾子そうし・曾子門人・漢儒かんじゆ説とあるが判然としない。日本への伝来については、六〇四年聖徳太子による「十七条の憲法」や七〇一年(大宝元)の大宝律令の中に、「およそ学生は必ず『孝経』・『論語』を兼修けんしゆすべきこと」とされているので、遅くとも七世紀には伝来していたことになる。内容は、

子曰 夫孝徳之本也
子曰く、それ孝は徳の本なり
孔子がおっしゃった。孝行があらゆる道德の根本なのだ

とし、父母に対する孝を諸徳の根源としている。また、

身体髪膚、受之父母、弗敢毀傷、孝之始也

身体髪膚、之を父母に受く、敢えて毀傷せざるは、之孝の始めなり

自分の身体は両手・両足から毛髪・皮膚の末に至るまで、すべて父母から頂戴したものである。それを大切に守って、いわれもなくいため傷つけないようにする。それが孝行の始めなのだ。

これは、明治期の「教育勅語」に大きな影響を与えているもので、身体を害しないのが親孝行の第一歩であると説く。「論語」の曾子の親孝行の証しとして、死期が迫った折、己の身体に損傷のないことを弟子たちに示している。尊徳も死の前年に同じ意味のことを日記に記している。

君子事親孝、故忠可移於君

君子は親に事えるに孝、故に忠は君に移すべし

有徳の君子は親に事えてよく孝行をつくす。だから、君に事えるとそれが君に対する忠誠となる。

は、父母への孝と君子への忠を説いている。

蓋天子之孝也、呂刑云、一人有慶、兆民頼之

けだし天子の孝なり、呂刑に云う、一人慶有れば、兆民之を頼むる

それが天子の孝行であろうな。だから、『書経』の呂刑篇にも言っている。上ご一人に善いお徳があられると、下万民がお蔭を蒙る。

は、天子の親孝行が庶民の親孝行の手本となること、つまり率先垂範すべきことを力説している。

また、

夫孝天之経也、地之誼也、民之行也

それ孝は天の経なり、地の誼なり、民の行ひなり

そもそも、孝は天の不変の法則である。地の万物を育てる永遠の秩序である。人間のなすべきことである。

とし、天地人三才にわたって孝行の大切さを説き、その徳の偉大さを述べている。

また、

疾則致其憂、喪則致其哀、祭則致其嚴

疾にはすなわち其の憂いを致し、喪にはすなわち其の哀しみを致し、祭にはすなわち其の嚴を致す
親が病の時には心から心配し、親が亡くなり喪に服する時は心から悲しみ、親の霊を祭る時は嚴か
にする。

は子の親に対するつとめを説いている。金次郎が父利右衛門の病を憂い、父の好物である酒を買うために夜なべして懸命に草鞋を作ったり、父に代わって酒匂川の夫役に出る逸話はすでに述べたが、ここでもその場面が彷彿とされる。また、母の実家である川久保太兵衛が一八〇二年（享和二）に死去した時、母よしとともに葬儀に出かけたが、身なりのみすばらしさ故に参列を認められなかった。その無念さが忍ばれる。母よしもこの時のことがショックであったのか、その直後、わずかに一ヶ月余で亡くなってしまう。

しかし、金次郎が偉大なのは、川久保家に恨みを抱くわけでもなく、川久保家が窮迫すると一八〇六年（文化三）祖母の薬代を代わりに支払ったり、一八〇八年（文化五）には自己の田地を売り払って援助したことである。また、その後も一八三〇年（天保元）には川久保太兵衛の娘りかを養ったり、川久保民次郎の面倒を見たり、一家再興の援助をしたりしながら指導にあたるのである。

『孝経』からは孝道の本筋を学んだ。尊徳は桜町に移住の後も、再三に渡り小田原の善栄寺に父母の墓参に訪れたり、永代供養料五〇両を奉納したりして孝養に勤めるのである。

（孝経の注釈に関しては、林 秀一『孝経』による）

(五) 『論語』

『論語』とは、四書（『論語』『大学』『中庸』『孟子』）の筆頭として孔子の弁術したことを筆記したものであることは周知の通りである。あまりにも有名な書で、東洋に於ける代表的經典として評価されている。

日本でも遣唐使によってもたらされて以来、学問入門の書として重要な位置を占めてきた。広く流布されているために詳述しないが、「仁」を最高の道徳として各書に引用され、また、人間生活の規範とされてきている。金次郎への影響をみると、金次郎が四書の入門書物として『論語』に学んだか否かは判然としない。むしろ、否定的な見解もある。例えば、富田高慶の『報徳記』（二宮尊徳全集三六卷六五頁）では、「是より鶏鳴に起て遠山に至り或は柴を刈り薪を伐り之を鬻ぎ、夜は繩を索ひ草鞋を作り、寸陰を惜み身を勞し心を盡し母の心を安んじ、二弟を養ふことにのみ勞苦せり。而して採薪の折返にも大學の書を懐にして途中歩みながら之を誦し少しも怠らず。是先生聖賢の學の初なり」として、『論語』ではなく、『大学』を初学の書としている。

金次郎が『大学』を手に薪を運ぶ像が全国に造られたため、疑問もなく富田説が受け入れられている

が、「ぐるり一遍」では『論語』を読む姿が通例とされている。いずれが最初でも問題ではないが、尊徳と改名してからもこの二書と『中庸』を基本としたことは書簡・日記・仕法書からも明らかである。

『論語』からの引用としては一八五五年（安政二）の尊徳の日記（二宮尊徳全集第五卷一一〇四頁）に、「千秋万歳楽、予が足を開け、予が手を開け、予が書翰を見よ、予が日記を見よ、戦々競々、深淵に臨むがごとく、薄水をふむがごとし」と曾子の親孝行の一節がある。これは曾子が死に臨んで己の手足の完全さを門弟に示したとされている場面である。

曾子有疾召門弟子曰、啓予足、啓予手、詩云、戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄氷、而今而後、吾知免夫、小子

曾子疾あり、門弟子を召びて曰く、予が足を啓け、予が手を啓け。詩に云う、戦戦兢兢、深淵を臨むがごとく、薄水を履むがごとしと、今よりして後、吾免るることを知るかな、小子。

曾子が病にかかった時、門人たちを召んで言った、「わが足を見よ。わが手を見よ。『詩経』には「おそれつ戒めつ、深い淵にのぞむがごとく、薄き氷をふむがごとく」とあるが、これから先は私ももうその心配がないね。君たち。」

これは死期が迫り、自己の身体の健全さを示すことにより、父母への孝養としたのである。金次郎時代に学んだ『論語』の一節を再現したわけである。

富田高慶によると、『大学』を学んだのが一八〇〇年（寛政一二）、弟富次郎を西栢山の奥津甚左衛門に預けてあったのを母への憐憫から引き取る決意をする時に、「明日から矢佐芝山に薪を採りに出かけ家計を助ける」として、その往復に『大学』を読んだと伝えているが、ここでは『論語』を先に検討したい。

次の一節は金次郎と小田原藩主大久保忠真との関係をを想起させる。

定公問、君使臣、臣事君、如之何、

孔子對曰、君使臣以禮、臣事君以忠

定公問う、君臣を使い、臣君に事うること、之をいかに、

孔子こたえてのたまわく、君臣を使うに禮を以つてし、臣君に事うるに忠を以つてす。

定公が「主君が臣下を使い、臣下が主君に仕えるのは、どのようにしたものだろう。」とおたずねになったので、孔子先生が答えられた、「主君が臣下を使うには礼によるべきですし、臣下が主君に仕えるには忠に依るべきです」と。

大久保忠真は農民金次郎にも礼を以つて対し、金次郎も藩主に忠を以つて答えた。金次郎を桜町に派遣する時、また、天保の大飢饉に際して、金次郎に小田原藩救済を要請する時などがこれにあたる。

一八三九年（天保一〇）の菅谷八郎右衛門にあてた手紙には『論語』の一節、子貢が孔子に仁について尋ねた一節が引用されている。

子貢曰、如能博施於民、而能濟衆者、何如、可謂仁乎、
子曰、何事於仁、必也聖乎、堯舜其猶病諸、夫仁者己欲立而立人、己欲達而達人、能近取譬、可謂
仁之方也止已。

子貢曰く、もしよく博く民に施して、よく衆者を濟わば、如何、仁と云うべきか。
子ののたまわく、何ぞ仁を事とせん、必ずや聖か、堯舜もこれなおこれを病めり、それ仁者は、己
立たんと欲して人を立て、己を達せんと欲して人を達す、よく近く取りて譬う、仁の謂というべき
のみ。

子貢が仁のことについて孔子におたずねして、「もし人民にひろく施しができて多くの人が救えると
いうのなら、仁といえましようか。」と言った。

先生（孔子）はいわれた、「どうして仁どころのことだろう、まさに聖だね。堯や舜でさえ、なお
それを悩みとされた。そもそも仁の人は、自分が立ちたいと思えば人を立たせてやり、自分が行き
つきたいと思えば人を行きつかせてやって、身近かにひきくらべることができる、そういうのが仁
の手だてだといえるだろう。」

この中で金次郎は仁の人は自分が立ちたいと思っても人を立たせやり、自分が行きつきたいと思つて
も人を行きつかせてやるようにすべきことを述べている。また、報徳仕法の特徴でもある分度（特に

支配者に対して）の参考としたであろうことは、次によるのではあるまいか。

哀公問於有若曰、年饑用不足、如之何、有若對曰、盍徹乎、曰、二吾猶不足、如之何其徹也、對曰、
百姓足、君孰與不足、百姓不足、君孰與足。

哀公、有若に問いて曰く、年饑えて用を足らず、之を如何、有若對えて曰く、なんぞ徹せざるや、
曰く、二にして吾たらず、之を如何ぞ其れ徹せんや、對えて曰く、百姓足らば、君誰と共にか足ざ
らん、百姓足らずんば、君誰と共にか足らん

哀公が有若におたずねになった、「凶作で費用が足りないが、どうしたものだろうか。」有若がお答
えしていった、「年貢を一割になさってはいかがですか。」「年貢が二割でも私は足りないのに、どう
して一割にするのか。」有若がお答えていった、「万民が十分だというのに、殿さまはだれといっ
しよでたりないのでしょうか。万民が足りないというのに、殿さまはだれといっしよで十分なので
しょうか。」

凶作で為政者の収入が足りない時、有若が年貢の引き下げを提案した。百姓が足りないのに、殿様だけ
が十分ということは為政者としてはふさわしくないことである。

この一節は金次郎が一八二二年（文化九）に小田原藩家老服部十郎兵衛に奉公し家政立て直しを行う
にあたって、質素儉約（分度）の徹底を図り、一八二二（文政五）年に小田原藩主大久保忠真から弟宇

津家桜町領四〇〇〇石の復興を依頼された時も、宇津氏に対して厳しく分度を要求し承認させている。その他各地の仕法に於いても、為政者にこそ分度の確立を厳しく実行させている。上には厳しく、下には温情を示すことを基本方針として確立させたのである。

次の、

子路問政、子曰、先之勞之、請益、曰、無倦

子路政を問う、子の曰く、之に先んじ之を勞す、益を請う、曰く、倦むこと無かれ

子路が政治のことをおたずねした。孔子先生はいわれた、「率先すること、ねぎらうことだ。」いま少しとおねがいすると、「怠ることのないように。」といわれた。

では、率先すること、ねぎらうことの大切さや怠ることをなくすことを実践で示している。これは二宮尊徳が終生実践し続けたことである。少年期にも、村の夫役を率先して実施し、村民に少年ながらも畏敬の念を抱かせた。栢山時代も含めて善行者に対して自ら表彰にあたり、錢や農具を与えた。勤労に関しても誰よりも早く作業を始め誰よりも遅くまで作業をした。このことは、留岡幸助氏の『報徳一夕話』の中に尊徳の実弟三郎左衛門の孫、二宮兵三郎の談がある。

「祖父がこういうた、月の夜などには、兄（金次郎）と一〇時頃まで田畑に出て働いていたが、兄は一向に帰ろうとせぬから、もう兄さん、狐が泣くようになったから、帰ろうではありませんかとい

うて、兄と一緒に帰ったことが度々ある。」

また、小田原時代というより、桜町時代の話ではあるが、富田高慶の『報徳記』（二宮尊徳全集第三六卷八〇頁）では、「鶏鳴より初夜に至まで、日日廻歩一戸毎に臨て人民の艱難善惡を察し、農事の勤惰を辨じ田圃の經界を察し、荒蕪の廣狹を計り土地の肥饒流水の便利を考へ大雨暴風、炎暑嚴寒といへども一日も廻歩をやめず」と述べ、尊徳の勤勉さと率先垂範ぶりを裏付けている。

尊徳のある意味での頑固さは次の一節でも証明される。

子路問事君、子曰、勿欺也、而犯之

子路、君に事えんことを問う、子曰く、欺くことなかれ、しかして之を犯せ

主君に仕える時、欺いてはいけない。もし、主君が誤っていたら、逆らっても諫めよ。

この孔子の言葉を、金次郎は大久保忠真に対して実行した。

富田高慶の『報徳記』（二宮尊徳全集第三六卷一七〇頁）によれば、一八三六年（天保七）の天保の大飢饉の時、大久保忠真から小田原藩救済の要請を受けた金次郎は憤然とする。

臣此地に至れるより以来萬苦を盡し再復安民の事を勤む何ぞや君の委任辭し難きが故なり、今凶機

の時に當り此民を救はんとして寸隙を得ず、然るに臣を召し玉ふ事何ぞや。初め此地の興復を任じ玉ふの時に當り功を奏せざる中は召さず往かざるの約を為せり、然るに今飢民を棄て江都に至らしむるもの君過てりと謂ふべし、我れ命に應ぜず、若し尋問の事あらば君自ら来り玉ふべし、何ぞ臣を呼事あらんや。子歸府して此旨を言上せよ。

しかし、賢君大久保忠真は、「理にあらざれば、我が命も奉ぜず」と金次郎の言い分を認めたのである。尊徳の究極の命題は「以德報徳」であるが、これは『論語』の一節、

或曰、以德報怨、何如、子曰、何以報徳、以直報怨、以德報徳
 或る人の曰く、徳を以つて怨みに報いば、如何、子の曰く、何を以つてか徳に報いん、直きを以つて怨みに報い、徳を以つて徳に報ゆ

ある人が「恩徳で怨みのしかえしをするのはいかがでしょう」といった。先生はいわれた、「では恩徳のおかえしには何でするのですか。まっ直ぐな正しきで怨みにむくい、恩徳によって恩徳におかえしをすることです。」

から学んだ事は明白である。また、大久保忠真も一八三一年（天保二）正月に「汝の道は論語の「徳をもって徳に報いる」にほかならない」と述べたといわれている。尊徳においての「論語」は少年期から

生涯を通じての經典であつた事が窺われる。

金次郎は『論語』からは最高道徳としての「仁」を学び、それを「徳」として体系化し、自ら実践躬行する事によつて、「徳」の実行者として、村人へのねぎらい・廻村指導・奇特者の表彰など率先垂範したのである。また、「分度」の確立を後世なすわけであるが、その下地を『論語』から学んだと思われる。（以上、論語の注釈に関しては、金谷治の『論語』による）

（六）『大学』

『大学』も『論語』と相前後して学んだことは種々の逸話からも裏付けられる。二宮金次郎という誰もが想起するのは薪を背負いて『大学』を読む銅像・石像である。確かに金次郎は『大学』を終生手元に置き、繰り返し学んでいる。

二宮金次郎が終生手元から離さなかつた『大学』とはいかなる書であり、この書から金次郎がいかに影響を受け、尊徳思想に結び付けていったのかを検討してみたい。

『大学』は元『礼記』四九篇の中の第四二章であり、これを抜き出して、四書としたのは南宋の朱熹である。『大学』の三綱領として

- 一、明明徳　　明徳を明らかにする。
- 二、親民　　民を親しませる。
- 三、至善　　至善に止まる。

また、八条目として

一、天下を平らかにする。

二、国を治める。

三、家を斉える。

四、身を修める（身を慎み深くする）。

五、心を正す（心を落ち着ける）。

六、意を誠にする（自らを修める）。

七、知を致す（自己の知識を十分に究める）。

八、物に格る（世界の事物に内在する理を究めつくす）。

が要点とされ、天下国家の政治もその根本は一身の修養にあるとされている。

具体的には、次のように説明される。

大学之道、在明明徳、在親民、在止於至善、知止而后能静、静而后能安、安而后能慮、慮而后能得、

物有本末、事有終始、知所先後則近道矣

大学の道は、明徳を明らかにするに在り、民を親しませるに在り、至善に止まるに在り、止まるを知りてよく静かに、静かにしてよく安く、安くして后よく慮り、慮りて后よく得、物に本末有り、事に終始有り、先後知るところあれば則ち道に近し

大学で学問を学ぶべきことは、徳を身に付け、それを光り輝かせることである。この行為から民が親しみ合うようにすることであり、最高善の境地にふみとどまることである。最高善にとどまっていれば、落ち着きが出る。落ち着きが出るといつも平静でいられる。平静であって、安らかになり、物事を正しく考えることができ、正しく考えることができると最高善を達成できるものだ。物事は根本と末端がある。初めと終りがある。何を先にし、何を後にすべきかがわかるなら、正しい道を得たことになる。

この節での重要な点は「徳を身に付けること」であり、「本末を明らかにすること」である。金次郎がもつとも影響を受けた部分である。金次郎は幼少時より苦難の体験を経ながらも多くの陰徳を積んできた。それは父母への孝養であり、二弟へのいたわりであり、酒匂川堤防夫役時の草鞋作りであり、酒匂川堤防への松苗の移植であり、近隣の恵まれぬ人への喜捨であつたりした。

金次郎の人生を決定付けたことは何よりも総本家再興の土台を築いたことである。一七九七年（寛政九）に総本家の九代目儀兵衛が総本家が建立した薬師堂（善栄寺東側）で没し、絶家となつた。

儀兵衛の晩年は財産をすっかり失い、最後に残つた稲荷社で雨露をしのぎ村民の施しを受けるまでに落ちぶれており、継子もなく、一族一人として総本家再興を考える者もなかった。一〇歳の金次郎がいかなる目で総本家当主の姿を見ていたであろうか。一八四八年（嘉永元）に一族（二宮常三郎他）にあつた書簡（二宮尊徳全集第一四卷六二〇頁）によると、

本家式數年致退轉居、數多亡靈、分家一統は勿論、其外に至迄崇りをなし、折々相煩ひ、
 藥用加持祈禱、種々様々諸雜費等相懸り、致困窮難涉（以下略）

二宮本家が数十年絶家となり、多くの靈が分家やその周辺にまで祟りとなつて現れ、病におかされ、
 藥を服用したり、加持祈禱したりするなど様々な費用が懸り、困り果てていた。それも、一族が誰
 一人として本家再興に取り組もうとしないからである。

と記している。金次郎の本家再興の意図が読み取れる。

一八〇五年（文化二）、金次郎は総本家再興を志し、わずかに竹林として残った稲荷社の土地（四畝一
 八歩）に垣根を結び、数年管理したところ、一八〇九年（文化六）に竹を伐採し売却した利益が金二朱
 錢五七〇文になった（この竹林は昭和三八年まで存在した）。これに自らの資金三分余を推譲し、計一
 両として総本家再興の善種金としたのである。

『二宮尊徳全集第一四卷』（六二二頁）によると、「このもの一家取り立て相続仕法の善種を得候につき、
 助成のため差し出し」、総本家の「一家再興相続手段帳」を作つたのである。この後、二宮一族の善種を
 得、しだいに利も生み、善種金は増加していった。この善種金は桜町移転の際、一族からの推譲分を返
 却し、残りを桜町での推譲金として使用した。このため総本家再興は遅れることになるが、推譲金は桜
 町を筆頭に各地の仕法に使われ多くの陰徳を生み出し、後の総本家再興の陽徳として明らかになる。

『二宮尊徳全集第一六卷』（三二七頁）の「本家復興地所収納調」には「天保一二年より請戻に着手し、
 天保一四年に至つて約四町歩の地所が出来た。これを小作預けとして年々の収納を記録したもの、即ち
 積小致大の法則によつて積立て、相續者の生ずるを待つ所の準備が出来た。その後も地所の購入を続け
 た」とある。この後、常三郎の弟増五郎に田畑・財産の管理を任せ、一族と相談の上、増五郎を総本家
 の相續人として決定する。金次郎の当時の思惟は一八五四年（嘉永七）一族（二宮常三郎他）にあてた
 書簡（伊右衛門式家株再興田畑作徳取扱方相談書）で明らかである。（同四一六頁）

略く右作徳金之分、二三ヶ年も本家先祖代々供養のため、善栄寺へ相納、厚菩提を弔ひ、其上村為
 相成候様取計候はゞ、本家式無量之陰徳積善にも相叶、永久再潰之憂無之、詰り親類縁者子孫永々
 之幸共相成可申續、我等幼年より深致心配心掛候志願押立、本家永續之基を立、奉安、御趣意、御
 互に致安心度、此段及御候、若及後年、篤實誠意、本家式相續相當之人物出候時は、親類縁者一同
 能々相談之上、家株相渡、為致相頼候處仍如件

右田畑からの収納金二三ヶ年分を、本家先祖代々の供養のため、善栄寺に納め、厚くその菩提を弔
 い、その上、村のためにもなるように取り扱つたので、本家のはかりかねないほどの陰徳積善にも
 なり永久に本家が再びつぶれる心配のないように、つまり、親類縁者子孫永久の幸福ともなるよう
 に思う。もし、後年になり、篤実で誠意のある者で、本家を相続するにふさわしい人物が出た時は、
 親類縁者よくよく相談して、本家の財産を渡し、相続させ、私が少年時より深く心配し心掛けてい

た本家再興の願いを成就し、本家永続の基礎を立て、本家を安置し、その趣旨を一族が理解し、お互いに安心致したく、この計らいをお頼み申し上げたく思う。

金次郎は、善栄寺に総本家の先祖代々の供養を依頼し、総本家の再興を取り決め、総本家と一族の永代の奉安のため、互助を指示している。「一族一家主義」であり、やがて「一村一家主義」へと発展していく。

この尊徳の本末思想を物語る典型的な例として、一八四九年（嘉永二）に尊徳は善栄寺に墓の建立を指示した手紙を残している。墓石正面に一〇人の戒名を彫らせている。上段右から総本家初代の伊右衛門夫妻・九代儀兵衛・三代万兵衛夫妻、下段に右から祖父銀右衛門・四代万兵衛夫妻・父利右衛門・母よしの戒名があり、南面には夭折した二人の子供の戒名がある。これは金次郎が本末思想を基に、いかに祖先を大切にしたかを窺い知る事ができる資料である。己の父母を正面上段に持つてこないのは決して父母を軽視するからでなく、本ありて末ありとする尊徳の思想そのものである。

未だ自家の再興もならないのに、総本家再興を目指したのは「大学」からの本末思想の影響そのものであり、まさに報徳仕法の着手である。以後、総本家三代目伊右衛門から分家した二宮権右衛門家と二宮三郎左衛門（実弟友吉）家の再興にも取り組み、自ら「一族一家主義」を示している。

『大学』の影響と思われるのは、金次郎の道歌集『三才獨樂集』にもいくつかあらわれている。在明明徳と題して「豊あしのふか野が原を田となして、食をもとめてくらふ楽しさ」と詠んでいる。酒匂川の

氾濫で田畑が砂礫で埋まり、苦難を乗り越えながら、己の田畑を復興する喜びが忍ばれる。また、「曇らねば誰がみてもよし富士の山、うまれ姿でいく世経るとも」と詠み、『大学』の、

曾子曰く、十日所視、十手所指、其嚴乎、富潤屋、徳潤身、心広、体胖、
故君子必誠其意

曾子曰く、十日の視るところ、十手の指指す所、其れ嚴なるかな、富屋を潤し、徳身を潤す、心広ければ体ゆたかなり、故に君子は必ず其の意を誠にす

曾子はこう言った。「おおぜいの目に見つめられている。おおぜいの手に指さされている。誰もいな
いと思つてはならぬ。畏れつつしむべきことだ」。財産ができると家屋もその恩沢を受けるように、
内に徳ができると人の身体もその潤いを受ける。公明正大であると肉体もおおらかになる。そこで
君子は自分の意念を誠実にするのである。

の中に至誠実行を見たのである。（金谷 治訳注 『大学・中庸』三九頁）

『大学』からは身を治め、家を斉え、国を治めることや、本末思想を学び、その中から、尊徳思想特有の「推譲」を唱えていく。さらに本末思想を発展的に捉え、各地の報徳仕法の萌芽を見出だすのである。
（大学の要旨・注釈に関しては、金谷治『大学・中庸』による）

既に学習した『実語教』『童子教』『孝経』『論語』から、学問・孝道・礼・仁などの大切さを学んだ。

それを実践していく過程の中でさらに多くのものを学んでいった。尊徳思想の特色は知即行である。行の伴わない知は徹底的に排除した。

(七) 中庸

『中庸』は『大学』と同じように朱熹が『礼記』三一篇から抜き出し独立させたものである。作者は孔子の孫、子思とされている。内容としては、中庸・誠を説くものである。

さらに『中庸』は、「本性のままに従っていくのが道であり、その道を誰もが踏み外さないように治めるとのえて導くのが教えであるとし、性・道・教の三者をあげて人間本来の在り方を体系化したものである。これは、第一章の、

天命之謂性、率性之謂道、脩道之謂教、道也者、不可須臾離也、可離非道也、是故君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞、莫見乎隱、莫顯乎微、故君子慎其独也

天の命ずるを之性と謂い、性に率うを之道と謂う、道を脩むるを之教えと謂う、道なる者は、須臾も離れざるなり、離れるべきは道に非らざるなり、これ故に君子は其の睹ざるところに戒慎し、その聞かざるところに恐懼す、隠れたるより見わるるはなく、微かなるより顯わるるはなし、ゆえに君子は其の独を慎むなり

天が、その命令としてわりつけて与えたものが、それぞれの本性である。その本性があるがままに従っていくのが、道である。その道を治めるとのえたのが、聖人の教えである。道というものは、ほんのしばらくの間も人から離れることのないものである。離れられるようなものは、真の道ではない。そうしたわけで、君子は自分で見聞しない、はつきりしないことについても、いつもわが身を慎しんで緊張を続けている。隠し事や微小なことほどかえって露見しやすいものだ。そこで君子は内なる己れ自身を謹慎して修めるのである。(金谷 治訳注『大学・中庸』一四二頁)

で、天が命ずるを性、性に率うを道というとし、道を脩むるを教とした有名な一節である。

喜怒哀楽之未発、謂之中 以下略

喜怒哀楽をいまだ発せざる、之を中と謂う

喜・怒・哀・楽等の感情が動き出す前の状態、それを中と言う。

で、心が平靜な状態を中とし、理想の状態としている。(同一四三頁要約)

仲尼曰、君子中庸、小人反中庸 以下略

仲尼曰く、君子中庸し、小人中庸に反す

孔子が言われた。「君子は中庸の徳を守るが、つまらない小人は中庸の価値がわからずに背くものである。(同一四六頁)

で、君子は中庸の徳を守れても、小人は中庸を守れないとして、正しい道の実践の難しさを説いている。特に尊徳は『中庸』を『大学』と並んで愛読した。尊徳の『中庸』に対する評価を福住正兄は『二宮翁夜話巻の一の一一』（二宮尊徳全集第三六卷六八四頁）で次のように言う。

儒学者あり曰、「孟子」は易し「中庸」は難しと、翁曰予文字上の事はしらずといへども、是を實地正業に移して考ふる時は、「孟子」は難し「中庸」は易し、いかんとなれば、夫孟子の時道行れず、異端の説盛んなり、故に其辯明を勤めて道を開しのみ、故に仁義を説て仁義に遠し、卿等「孟子」を易しとし「孟子」を好むは、己が心に合うが故なり、卿等が學問するの心、仁義を行はんが為に學ぶにあらず、道を踏まんが為に修行せしにあらず、只書物上の議論に勝ちさえすれば、夫にて學問の道は足れりとせり。（以下略）。

尊徳は『孟子』を机上の學問とし、『中庸』の実践に於ける行い易さを評価している。

尊徳は有名な水車の例で、中庸の大切さを説いている。福住正兄の『夜話巻の一』（二宮尊徳全集第三六卷六七九頁）で語る。

翁曰夫人道は譬ば、水車の如し、其形半分は水流に順ひ、半分は水流に逆ふて輪廻し、丸に水中に

入れば廻らじして流るべし、又水を離るれば廻る事あるべからず、夫佛家に所謂知識の如く、世を離れ欲を捨たるは、譬ば水車の水を離れたるが如し、又凡俗の教義も聞ず義務もしらず私欲一偏に著するは、水車を丸に水中に沈めたるが如し、共に社會の用をなさず、故に人道は中庸を尊む、水車の中庸は、宜き程に水中に入て、半分は水に順ひ、半分は、流水に逆昇りて、運轉滯らざるにあり、人の道もその如く天理に順ひて、種を蒔き、天理に逆ふて艸を取り、欲に随て家業を励み、欲を制して義務を思ふべきなり。

尊徳は天道と人道が独立して存在するのでなく、時には逆らい、時には従い、相互補完し合つて成り立っていると説いている。これは尊徳の學問が形而上學に終わらず、江戸期に於けるプラグマティズム的な要素を持っていたことを如実に示す例でもある。

『中庸』に関しては尊徳が日記・書簡・仕法書に引用していることを見ても、金次郎時代に学習した内容を己の思惟の中に入れておくことは確実だが、小田原時代前期の行動の中にそれを具現化したものを見出すことは難しい。尊徳が実践を通して掴み得た体験的思惟と學問的な思惟とが相俟つて『三才報徳金毛録』以下の著作となり、報徳哲学となつていくのであるが、何よりも尊徳の哲学形成にあたり革命的転機たりえたのは、彼にのしかかった試練であった。それは逆らう事のできない天理（自然災害・肉親の死）であつたり、報徳仕法実践にあつたの障害（桜町での前半期の不調・小田原藩首脳との対立）であつた。それを克服し得たのは、「右足一步、左足一步」と歩む中で、「誠は天の道なり、これを誠に

するは人の道なり」とする『中庸』の哲学であった。

(八) その他の逸話と哲学形成

小田原時代前期の哲学形成への影響について、自然災害の脅威と書物からの影響という視点で追究してきた。尊徳は後年に再三、酒匂川の洪水体験を語っている。その中で天理を悟り、荒田の開発から開闢を思惟にいれる。

一方、検討してきた書物（『実語教』『童子教』『孝経』『論語』『大学』『中庸』）から、金次郎が学びつつた数多くの知と実践躬行は観念的哲学を排し、実学尊重の立場に立った事は今までみてきた逸話からも明らかである。少年期に於ける『実語教』『童子教』からは儒教的道徳観念、特に智に至る道・孝道を、仏教的観念、特に因果の道を学んでいる。『孝経』からは孝道の本筋を学び、『論語』からは最高道徳としての仁を学び、『大学』からは徳と本末思想を学び、『中庸』からは行為に於ける中庸と誠を学んでいる。

二つの視点（書物から何を学んだか、後世の伝記作家が書物から創作したのではないか）に於いて、金次郎の逸話が伝説として美化されている面は否定できないものの、多くは金次郎が学即行として実践躬行したことが窺われる。これは金次郎の少年時代の純真さの反映であると同時に、己の人生に対する積極的な学問の導入でもある。その上、これらの書物は後年の尊徳哲学の基盤として活用されていく。尊徳の著作・日記・書簡・仕法書に数多く引用されている。故に、金次郎に関する逸話が古典から創作

されているのではないかという疑問は払拭される。

五 体験からの学び

今までに追求してきた逸話の中に、すでに「勤儉」「推譲」が垣間見えている。さらには「開闢」の精神も学びとっている。それらはいずれも後年の尊徳哲学の中心として位置付けられるものである。

しかし、二つの視点以外の逸話からも尊徳の哲学形成に重要な位置を占める可能性があることも視野に入れて尊徳の生い立ちから今まで検討しなかつた部分を中心に再検討したい。

(一) 万兵衛家時代

一八〇二年（享和二）に母よしが亡くなり、金次郎は伯父の万兵衛家へ、友吉と富次郎は母の実家である曾我別所の川久保太兵衛家に預けられた。ここでは特に万兵衛家時代の金次郎について追究したい。金次郎の父利右衛門は四代万兵衛の弟であり、金次郎の系図上の祖父銀右衛門（三代万兵衛の弟）の子ではない。富田高慶の『報徳記』をはじめ、多くの二宮尊徳伝に類する書の著作者が、「利右衛門は栢山の善人、万兵衛を金次郎をいじめるかたき役」としているが、万兵衛の地元での高い評価・その後の金次郎の仕法への協力的態度・金次郎を一人前の農民に育成しようとする使命感・金次郎が万兵衛家からの独立時の賛辞などから、万兵衛の本意がいかなるものであつたかは自ずと知れよう。

さて、万兵衛家時代の逸話として有名なものがある。一つは、万兵衛家の農作業を終え、夜学に灯油

を使ったところ、万兵衛に灯油の無駄使いと百姓に半端な学問は要らぬと強く叱責され、村人から菜種を借り、仙了川の堤に蒔いたところ、翌年には七、八升の収穫を得たという（仙了川の堤には昭和四〇年代でも菜種やイチジクが栽培されたり、広い所では畑としても利用されていた）。この灯油を使い、夜学に励み『四書五経』を学んだと思われる。万兵衛も目こぼしをしたのではなからうか。弟利右衛門にはかなりの学識があったことが金次郎への教育で推測できるが、万兵衛自身もかなりの学識があったのではなからうか。万兵衛は己の学問をひけらかす事なく、分家の当主として金次郎を独り立ちさせたかっただけではあるまいか。

二つは、遺棄田に捨て苗を植え一俵余の米の収穫を得た逸話である。現在の二宮尊徳記念館の西側にある用水路の脇に記念碑があるが、この付近は用水路が複雑に曲り、いつも赤褐色の濁った水が滞留していた（昭和四〇年当時）。この付近の地質は砂礫層からなる浅い土壌であって、透水性が不良で排水も悪く土壌生産力は低い。裏作の導入も困難な場合が多い。金次郎時代も水捌けの悪い湿地であったと思われる。誰もが気にも止めない下々田に捨て苗を植えることにより、積小致大の法則の基礎を固めることになる。

また、洪水で廃田と化した自家の田畑を開墾することにより、後の「開闢元始の道」を切り開くことになる。

(二) 独立志向時代

一八〇四年（文化元）に一六歳の金次郎は世話になった万兵衛家に別れを告げ、村の上の名主であつ

た岡部伊助方の男衆となる。万兵衛は金次郎の独立を大変喜んだと伝えられている。学問好きであつた岡部伊助は度々学者を招き、自ら講義を聞くとともに子弟にも受けさせた。金次郎も仕事の合間にその講義に聞き耳を立てたことは容易に想像がつく。独立して賃仕事をすることも大きな目的であつたらうが、大好きな学問をさせてくれる可能性の高い岡部家に、向学心に燃える己の心の安住地を求めたのではなからうか。

この年、金次郎は自耕地で米五俵を収穫する。

一八〇五年（文化二）に、金次郎は二宮一族で当時最も有力であつた、下の名主二宮七左衛門方の男衆となる。金次郎は後に七左衛門の長男常三郎を信頼し、己が桜町に移住以後の総本家再興をはじめ、二宮一族のとりまとめを委任する。これは金次郎の常三郎宛の多くの書簡からも明らかである。また、総本家の一〇代目として常三郎の弟増五郎を相続人と決める。

この年自耕地より米二〇俵を収穫する。七左衛門家の仕事の合間に遺棄されていた自家の田畑の開墾を進めたことが明らかになってくる。

岡部家と七左衛門家での男衆時代の勤勞報酬と、開墾地からの収穫を得ることにより、かなりの金銭を手にし、食事などの支出は他家の世話になることにより極力抑えることができた。こうして金次郎は勤勞・分度・推譲を自己の思惟に入れ、開墾からは開闢を思惟に入れていく。

一八〇六年（文化三）に金次郎は質入れ地九畝一〇歩を三両二分で買い戻すとともに、廃屋と化した自宅を修繕し、一人住まいをするようになる。

ついに、一八一〇年（文化七）には田畑一町四反五畝二〇歩を所有する地主として一家再興を成し遂げる。母の死から実に八年の歳月が流れていた。一家再興の成功は金次郎にとって大変な喜びであったろうが、その過程で学びとった種々のことは、後世の彼の哲学形成にとって重要な要素となった。

（三）小田原時代前期の総括

尊徳の哲学形成にあたって最も重要な位置を占めると思われる小田原時代前期には、過酷な自然災害の体験・両親の死と兄弟の生き別れという、避けようもない天理の中で彼はまさに必死の思いで生き抜いていった。努力の甲斐があり、一家再興に成功するのであるが、それ以上に多くのものを学んだ。それは天地人からの学びと多くの書物からの学びであった。両親の薫陶で、「学問の大切さ」「他者へのいたわり」を学び、書物の中から、儒教的道徳心・仏教的輪廻観を学んだ。さらに、周囲の人々の優しさから報恩の気持ちを抱いた。

後に尊徳哲学として体系付けられる萌芽を見いだすことができる。何よりも「天道」と「人道」を己の思惟に入れたことである。人間の力では如何ともしがたい自然の偉大さ・輪廻を悟った。また、己や民衆の努力によって、獲得できうる成果をも悟るに到った。天変地異による猛威、両親や末弟富次郎の死や総本家儀兵衛の末路から、彼は自己を含めた民衆がなさねばならない「人道」を強く意識するようになった。

また、一家再興の自信から「勤勞」・「分度」・「推讓」の必要性を自覚し、後の報徳仕法の萌芽を

見いだすようになっていく。特に絶家となった総本家の再興を視野に入れた竹藪の手入れ、数年後の竹売却から総本家再興の善種金を積み立て始めたことは報徳仕法の最初のステップとして大きな位置を占める。

少年金次郎が「実語教」・「童子教」・「孝経」から始まって、四書五経に至る書物から、「学びの大切さ」と「実行の必要性」を素直に感じ取り、孝養心を筆頭として、儒教的道徳心を身につけていった。彼の大きな特色としてあげられるのは、

第一に、「学問を繰り返して学ぶ大切さ」を悟ったことである。これは通常、初学の書とされるような書物を終世手元から離さず、多くの書簡や日記に引用していることである。

第二に、「学即行」を実施したことである。彼は書物から学んだ多くの教訓を実際行動に移した。まさにプラグラティズムの実践である。「暈の上の学問」として、空理空論的学問を排したのである。

第三に、書物からの学び以上に天地人からより多くのことを体験を通して学んでいったことである。天理のなせる術の偉大さや輪廻観を悟ることによって、人道のなすべきことを知り、「天道」と「人道」を体系付けていったのである。

遺棄された下下田に捨て苗を植え、秋には一俵の収穫を得たことにより、積小致大の法則を見いだした。これは後の報徳仕法の根幹をなす思想として、尊徳の思惟の中に入れられていった。

酒匂川の氾濫で砂礫に覆われた田畑を開墾することによって、開闢の精神を学び取った。彼はこの困難な作業の中から、己の田畑の復興に喜びを見いだしたのである。彼はその喜びを、道歌で「豊あしの

ふか野が原を田となして、食をもとめてくらふ楽しさ」と詠んでいる。この時の思いが尊徳の主著である。「三才報徳金毛録」として体系付けられることになる。彼は後に、自らの哲学を「神儒仏正味一粒丸」と称したが、その萌芽がこの小田原時代前期の行動に見てとれる。

尊徳は一家再興を成し遂げた自信・父母の薫陶・書物からの学び・村人からの学びを背景に、自家の繁栄からその視点はしだいに広がりを見せ、「一族一家主義」・「一村一家主義」へと発展していき、報徳仕法の原点となっていくのである。

①天道と人道

二宮尊徳の哲学形成過程の第一期として、小田原時代前期（一七八七～一八一二）を追究してきたが、彼が両親の深い情愛の中で育まれながらも、厳しい自然災害を体験し、かつ、両親を病で失う悲運にも遭遇したことは、天道に対する畏敬の念とともに、逆らい難さを感じとった。これは、天道に対して人道を体系づける要素たり得たことを物語る。天理の法則には逆らい難くとも、己の努力や己が徳を身に付けることによって、他人を感化し、その協力を得ることによって人道を増殖させることの端緒を見出すことができる。

尊徳が、この考えを後の「一円相」の哲学につながる一円行動の輪廻観として、思惟の中に入れたことも窺える。

②三教（儒教・仏教・神道）

少年金次郎が逆境の中でも無類の向学心を見せて、「実語教」「童子教」「孝経」「論語」「大学」「中庸」「孟子」「大和俗訓」などを意欲的に学ぶ中で、儒教的な道徳心を身に付けていった。また、「飯泉観音で逸話」や善栄寺の考牛和尚の指導、総本家九代儀兵衛の哀れな最期などから仏教への畏敬を感じ始めるとともに、仏教的輪廻観を感じとったことが見てとれる。洪水後の荒地開墾から神道的開闢の精神を感じとる。これらから後に尊徳が己の哲学を「神儒仏正味一粒丸」と称する萌芽を見出すことができる。

③勤儉・分度・推譲

両親を失い、家は廃屋となり、田畑は砂礫に埋もれながらも、地道な開墾や、万兵衛・岡部伊助・二宮七左衛門宅で世話になりながらも勤苦力功・儉約の中で一家再興に成功したことや、捨て苗の逸話から「積小致大」の法則を生み出したことは、後の報徳仕法の中心的な考え方である「勤儉・分度・推譲」の試金石として位置付けられる。

また、総本家再興を試み、小額ながらも善種金を推譲し続けたことも同様に、報徳仕法の中の仕法金運用の手始めとなったことが窺われる。

④孝道と他者へのいたわり

少年期の儒教的孝養心が、『孝経』を筆頭とする教訓書から生まれたのみならず、両親の情愛の中でさらにそれを実体験として自己の思惟の中に入れ、この孝養心を生涯保ち続けたことは前述した通りであ

るが、その孝養心を他者へのいたわりとして、自己の思惟の中に入れてともに、実際の行動として、没落しかけた一族への援助や貧窮者への喜捨の形で具現化している。

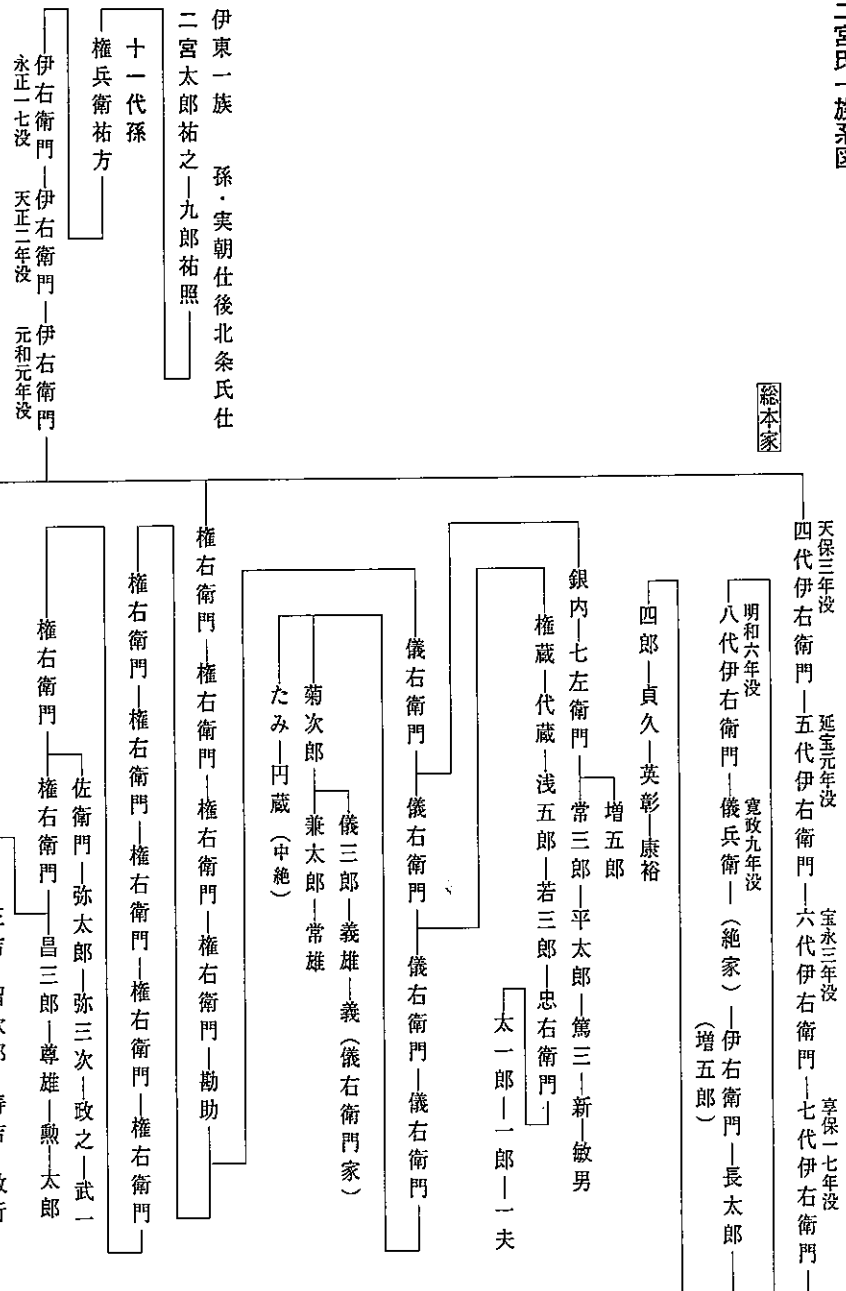
この孝道と他者へのいたわりは学問から学んだだけでは、具体的行為として現すのは容易であるまい。その基盤として、両親のわが子に対する情愛の深さや、貧窮者ひんきゆうしゃに対する両親の実際の行為が裏付けとして感じられる。

⑤本末思想

尊徳が生涯をかけて実践したのは、「本もとありて、末あり」とする『大学』の一節である。彼は一八〇五年（文化二）に総本家再興に着手し、一八五四年総本家の分家である常三郎の弟増五郎に総本家一〇代を相続させるのに四九年を要している。また、前述した墓石にも総本家の初代夫妻・九代儀兵衛を筆頭に刻むことよって、その意志を明確にしている。この本末思想は、単なる本家と末家の関係から発展し、一村一家主義さらには各地の報徳仕法に発展し、各地で実績を上げる基礎的な思想となっていくのである。

二宮氏一族系図

総本家



*尊徳の曾孫四郎が総本家一二代長太郎の養子となるが、故あって隠居する。後に曾我氏の直系中村家から貞久が養子となる。

(平成一四年 二宮康裕作成)

〈参考文献〉

二宮尊徳『二宮尊徳全集三六卷』 韻溪書舎 一九七七年
 下程勇吉『二宮尊徳の人間学的研究』 広池学園出版部 一九八〇年

『神奈川県史』「通史編三・近世二」 神奈川県 一九八三年
 『小田原市史』「通史編近世」 小田原市 一九九九年
 「史料編中世二」 小田原市 一九九一年
 「史料編近世二」 小田原市 一九八九年
 「史料編近世三」 小田原市 一九九〇年

『足柄上郡史』
 「庭訓往来」「美語教」・「童子教」諺解 足柄上郡 一九二三年
 岩波書店 一九九六年
 明德出版社 一九八六年
 岩波文庫 二〇〇〇年
 岩波文庫 一九八八年
 岩波文庫 二〇〇一年
 平凡社 二〇〇〇年

林 秀一『孝経』
 金谷 治訳注『論語』 岩波文庫 二〇〇〇年
 金谷 治訳注『大学』・『中庸』 岩波文庫 一九八八年
 小林勝人訳注『孟子』上下 岩波文庫 二〇〇一年
 竹内照夫『四書五経入門』 平凡社 二〇〇〇年

『モラロジー研究二九』 モラロジー研究所 一九九〇年
 『尊徳開顕』（生誕二百年記念論文集） 有隣堂 一九八七年
 岩本一雄『足柄平野の金次郎』 創本社 一九八七年
 藤田正勝『日本近代思想を学ぶ人のために』 世界思想社 一九九七年
 中野敬次郎『善栄寺縁起』 トウカイプリント 一九七五年
 二宮英彰・中村竜男共著
 『現代に生きる二宮尊徳』 潮流社 一九七五年
 『松田土木事務所一〇〇年のあゆみ』 神奈川県 一九九九年

酒井茂夫『酒匂川の沿革と氾濫の歴史』 酒匂川水系保全協議会 一九七八年
 奈良本辰也『二宮尊徳』 岩波書店 一九七三年
 『土地分類基本調査』小田原・熱海・御殿場 神奈川県 一九八七年
 貝原益軒（松田道雄訳）『日本の名著 貝原益軒（大和俗訓他）』 中央公論社 一九八二年
 『世界百科辞典』 平凡社 一九七〇年

〈資料〉

東栢山

東栢山の戸数の変化は江戸時代（天保年間）で約八〇戸（種々の文献で指摘あり）、明治初年で八三戸（栢山社の寄付帳）、大正十三年で九四戸（二宮長太郎香典帳、昭和十八年で八八戸（戦時中の配給物資控え帳）、現在は二九八二戸（桜井支所）と急増しましたが、変化が起こったのは昭和四十年前後からです。

*現在の戸数は、東・西栢山合計（比率は約二対一）

さて、大正十三年の香典帳によると（東栢山のみ）

- 二宮家 一四軒 木村家 六軒 竹井家 二軒
- 栢木家 三軒
- 曾我家 八軒 高井家 四軒 沢家 二軒
- 岡部家 七軒 瀬戸家 四軒 古性家 二軒
- 小沢家 七軒 岩田家 三軒 榑田家 二軒

黒柳家 七軒 古沢家 三軒 森家 二軒

その他は、一軒ずつで一八軒

*大正十三年にやや多くなっているのは、十二年の関東大震災で川東地区が壊滅しているのに、桜井村は損害が軽微であったことや、明治四十三年の酒匂川大洪水などの影響かも知れません。

二宮総本家に伝来されている文書

*金次郎からの書状三通

*益五郎あての二宮先生近況報告

*二宮権右衛門安政五年の先祖出自の文書

*吉良八郎から豊田正作あての文書

*女性の手になる文書

*天保十四年分限取調帳

*報徳歌集簿

*系図（伊東氏、二宮氏数種、曾我氏↓寛政重修諸家譜五三八）

*川匂神社・知足寺・曾我原村誌

*報徳道統巻、二宮翁誕生地建碑寄付帳（栢山報徳

会）

*孔子七一代、孔昭鵬先生からいただいた「報徳」の書

*図面多数

その他不明（見出し）の文書

以下年代順でなくて恐縮ですが（積んであった順）、

- 弘化四年 寛政九年 万延元年 安政六年
- 同年 安永元年 享保八年
- 同 二年 寛政元年 天明八年
- 文政三年 文久四年 宝暦元年
- 文久元年 天明八年 弘化四年
- 寛延三年 安政五年 安永七年
- 天保六年 同年 寛政元年
- 宝暦六年 明和六年 宝暦十年
- 寛保二年 天保十三年 天明四年

同年 明治五年 一元治元年

*書籍

大学二冊、中庸、詩経上下、易経上下、書経上下、実語教、童子教、古文孝経参疏上下、陸氏草木疏 図鮮一〇五、毛詩品物図